

新 刊 紹 介

Tadao YOSHIDA: **Japanese species of *Sargassum* subgenus *Bactrophyucus* (Phaeophyta, Fucales)**. Journ. Fac. Sci. Hokkaido Univ. Ser. V (Botany), 13(2): 99-246, 1983.

ホンダワラ属は褐藻類の中で最多数の種を擁する分類群で、J. AGARDH (1889) のシステムでは *Phyllo-trichia*, *Schizophycus*, *Bactrophyucus*, *Arthro-phyucus*, *Eusargassum* の5亜属に分けられる。本論文はこれらのうち、専ら北半球に産して分布中心が本邦及びその近傍の暖海域にあるとされる *Bactro-phyucus* 亜属の分類に再吟味を加えたもので、日本産ホンダワラ類の分類に関するモノグラフとしては YENDO (1907) の “The Fucaeeae of Japan” 以来のものである。

緒言、研究史について *Bactrophyucus* 亜属についての一般論議がなされている。そこではホンダワラ属の形態と初期生長様式を概説し、亜属の定義を述べ、次いで術語の解説と共に *Bactrophyucus* 亜属の種の分類のための形態学的特徴と成熟期について記述している。そしてこの論議のしめくりでは、基部(附着器、莖)と生殖器托の形状に着目して本亜属を更に細分した節レベルの分類系について論じている。すなわち、莖が直立し長く伸長して主枝を欠く *Spongocarpus* 節、莖は直立するが短く、主枝が長く伸長するもので円柱状の生殖器托をもつ *Teretia* 節、莖と主枝は前者と同様で扁平又は三角柱状の生殖器托をもつ *Halochloa* 節、莖が傾臥又は匍匐する *Repentia* 節の4節である。

次いで種の検索表が付されている。配列順に挙げると以下の28種で、この中には2新種(*印)が含まれる。*Spongocarpus* 節: 1. *Sargassum horneri* (アカモク), 2. *S. filicinum* (シダモク), *Teretia* 節: 3. *S. microceratium* (フシイトモク), 4. *S. confusum* (フシスジモク), 5. *S. pallidum* (ウスイロモク, 新称), 6. *S. muticum* (タマハハキモク), 7. *S. thunbergii* (ウミトラノオ), 8. *S. fulvellum* (ホンダワラ), 9. *S. ammophilum* (スナビキモク), 10. *S.*

hemiphyllum (イソモク), 11. *S. nipponicum* (タマナシモク), 12. *S. miyabei* (ミヤベモク), *Halochloa* 節: 13. *S. segii* (ナガシマモク), 14.* *S. yamamotoi* (ヨレモクモドキ, 新称), 15. *S. tenuifolium* (ウスバモク), 16. *S. ringgoldianum* (オオバモク), 17. *S. trichophyllum* (イトヨレモク, 新称), 18. *S. sagamianum* (ネジモク), 19. *S. micracanthum* (トゲモク), 20. *S. giganteifolium* (オオバノコギリモク), 21. *S. macrocarpum* (ノコギリモク), 22.* *S. autumnale* (アキヨレモク, 新称), 23. *S. siliquastrium* (ヨレモク), 24. *S. serratifolium* (ウスバノコギリモク, 新称), *Repentia* 節: 25. *S. okamurae* (ヒラネジモク), 26. *nigrifolium* (ナラサモ), 27. *S. yezoense* (エゾノネジモク), *S. yamadae* (アズマネジモク)。なお、16には新亜種として 16a. *S. ringgoldianum* subsp. *coreanum* (ヤナギモク, 新称) を加えている。

各論ではそれぞれの種について命名の根拠とシノニムを列挙し、詳細な種の記載、成熟季節、生育帯について述べ、多数の調査標本に基づく分布域、命名に関する問題点、類似種との形態的比較、生態的知見を記している。またそれぞれの種には精密な線画とタイプ標本写真、著者が所属する北大理学部標本室の標本に基づく詳細な分布図を付している。種ごとの記述の後に若干の疑問種についての説明があり、最後には本亜属の種の地理的分布パターンについて述べている。

ホンダワラ属の種の同定はこれまで大変に難しいものとされてきたが、本論文によって日本産 *Bactro-phyucus* 亜属に関する限りは不明な点が一挙に解消されたといつてよい。*Bactrophyucus* 亜属に関する分類学的検討がこの時期になされたということは、環境保全、海藻資源利用といった観点からこの分類群を優占構成種とする藻場、海中林への関心が高まりつつある昨今、まさに時機を得たものといえる。藻類研究者に限らず、藻場、海中林の生態調査に携わっている人々にとっても貴重な文献となるであろう。

(東水大・植・今野敏徳)